

エジプト学研究別冊 第1号

(1995-2)

The Journal of the Egyptian Studies
<Occasional Publication No.1 >

CONTENTS

本研究会開催の趣旨	吉村 作治	1
司会挨拶	長谷川 奏	2
調査の経緯と出土遺構の概要	長谷川 奏	3
<セッション1>		
レリーフブロックからの壁面装飾の復元考察		8
1. 出土位置とモチーフの関係	齋藤 正憲	10
2. プランBのモチーフ装飾	磯部久美子	13
3. プランAのモチーフ装飾	高宮いづみ	21
<セッション2>		
遺構の建造から破壊にいたるプロセスと年代軸の再検討		30
1. プランA周辺における	藤田 礼子	32
2. プランB南側地区における	白井 則行	37
3. プランC周辺における	長谷川 奏	39
<セッション3>		
石造建築物をめぐる建築学的問題		44
1. 出土建築遺構の建築学的考察	柏木 裕之	46
2. 出土建材の分析 一柱の復元的考察	草原 千裕	52
3. ヒエラティック・インスクリプションについて		
	西本 真一	56
短評 1	近藤 二郎	62
2	中川 武	65
総評	吉村 作治	67
参加者名簿		69
編集後記	吉村 作治	70

マルカタ王宮から見た「魚の丘」建築の特質

柏木 裕之*

Some remarks on the painted plaster at Kom al-Samak (6)

Architectural Characters of Mud Brick Building at Kom al-Samak

Hiroyuki KASHIWAGI*

Abstract

This article deals with an architectural character of mud brick building erected on the central platform at Malqata South Kom al-Samak. It is explained that the building was rebuilt on a large scale at least one time [first phase and second phase]. Though the condition of the remains was bad, the plan of the second phase building could be reconstructed by some drawing sketches and photos recorded mud bricks of pavement and foundations. From the result of analysis, the following characters were cleared. First, because of no traces of columns, it is judged that the building have not any columns. Secondly, it seems that the thickness of the wall is thin in comparison with the wall of the Palace of Amenhotep III, Malqata. Thirdly, the building is composed of small rooms and have not constructed any halls with columns. Fourthly, entrance and stair were jugged out from the south side of the building. It is interesting that this entrance style seems to be similar to the style of Amarna House, though the function between both buildings is different. At Amarna, some platform structures have been known, for example desert alters and Kom al-Nana. In these structures, the column hall are furnished with and the technique of foundation is different from the building at Kom al-Samak, however, the comparative study of these buildings between Amarna and Malqata South is needed.

* 日本学術振興会特別研究員

* Research Fellow of the Japan Society
for the Promotion of Science.

1. はじめに

「魚の丘」建築に関する基本的な事柄は、調査の成果をまとめた報告書「マルカタ南〔I〕—魚の丘— <考古編><建築編>」(以下、単に報告書と略す)において既に検討されていると考えてよい。最も大きな問題であるこの建築遺構の建立時期について報告書は、検出された煉瓦スタンプの王名などを根拠にアメンヘテプ3世による造営と解釈している。その後、建造物の用途や性格、建立時期の絞り込みなどを巡って研究が進められてきたが、いまなお意見の一致をみない問題も残されている。こうした事を生む原因の一つに、中央基壇の上に作られた建物の姿を描ききれなかったことが挙げられよう。ほぼ完全に失われてしまった基壇上の建物を復原していくことは確かに困難な作業であるが、西本助教授が指摘しているようにこの建造物の総合的な理解のためにはやはり不可欠な課題である。そこで本稿では、報告書の記述をもとに、「魚の丘」建築の概要を再度整理してみるとともに、この基壇上部に築かれた構築物がどのような特徴を持っていたのかを検討し、復原に向けて基礎的な資料としてゆきたい。

2. 「魚の丘」建築の立地

「魚の丘」建築は、新王国時代第18王朝の王アメンヘテプ3世によって築かれたマルカタ王宮址から南西へ約2km離れた場所に位置している。マルカタ地域の全体像を正確に把握することは難しいが、王宮址を中心とした地図をみると、「魚の丘」は南のはずれに孤立しているように思われる(図1)。一方「魚の丘」建築より更に約1.8km南西には、同じアメンヘテプ3世時代の基壇状建築物(コム・アル=アブド)が築かれている。これらを加えた地域全体を往時の都市区域と見なすならば、「魚の丘」建築は必ずしも辺境に立地しているとはいえない。

しかし、もっと王宮の近くに築くこともおそらく物理的には可能であったはずであり、実際王宮址内からも基壇状の建造物が認められている。この地が選ばれた理由は不明であるが、王宮から離れたその場所に建てねばならなかった積極的な理由があったと捉えるべきであろう。すでに指摘されている、巨大な人造湖ビルカト・ハーブーの西側の縁の延長上にほぼ位置し、かつ建物の長軸がこれと一致しているという特徴は確かに興味深い、むしろビルカト・ハーブーの造営以後に建立された可能性という点こそ考えるべき事のように思われる。さらにビルカト・ハーブーの南北端で挟まれる区域が何らかの都市領域を指し示していると考えれば、その外側に位置する「魚の丘」建築はその内に収まるマルカタ主王宮群と性格を異にする建造物であったといえなくはないだろうか。都市の視点からこの地域を広く捉え、そこから様々な施設の機能や配置の意味を解明していく研究が今後深化されることが望まれる。

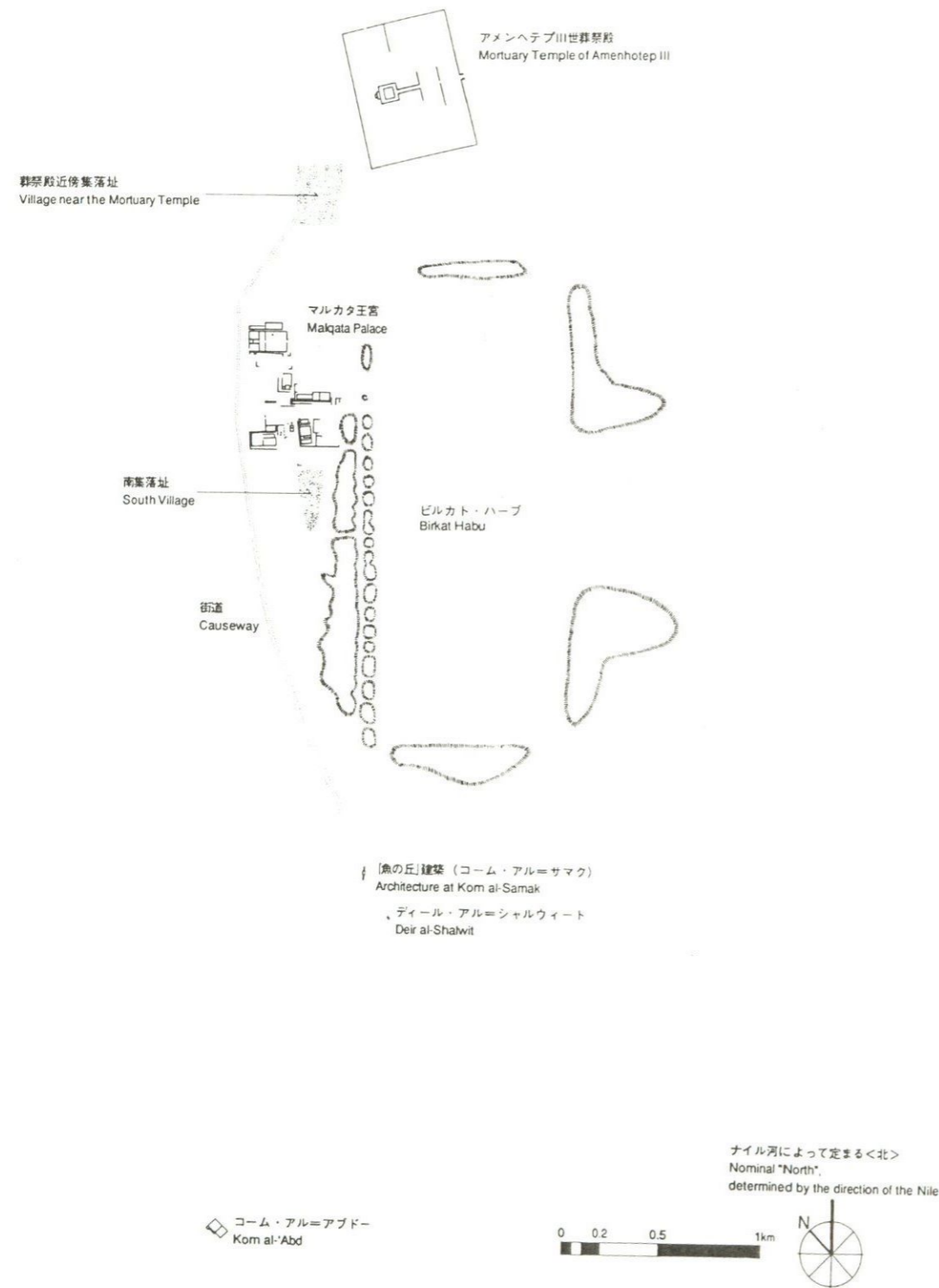


図1 マルカタ敷地図

3. 「魚の丘」建築の平面

3-1 第1期建物

調査の結果、「魚の丘」建築は少なくとも一度の増改築がなされた複合遺跡であったことがわかっており、前身の建物を第1期建物、発掘の現状で見る建物を第2期建物と名付けている(図2)。第1期建物は(図3上)、高さ約2.4m、一辺約19.2mの正方形基壇を持ち、その南北及び西側の3方に階段を備えている。また基壇上部の中央部分には何らかの建物が築かれたことが判っている。基壇側方に付く3つの階段のうち、南北の脇階段は基壇の両側面に沿いながらいずれも東から西に上昇していくのに対し、西側の階段は基壇西辺の中央に取り付き、東西方向に昇降する動線を採用している。この西階段はわずかに残された煉瓦列から卓越した推察力によって想定された階段であるが、一方で、日乾煉瓦造の施工精度をやや評価しすぎているようにも思われる。特に比較的良好に残る南北の脇階段や基壇に比べ残存状況が著しく悪いことは、幅が基壇の3分の1に及ぶほどの堂々とした階段であったことを想起すると、やや不自然に感じられる。そのため西階段についてはその存在自体も含め、総合的に検討していく必要があるであろう。

基壇上中央に築かれた建物は、南北約6.5m、東西約9.5mの東西に長軸をとる構成と推測されている。基壇が正方形という特徴的な平面をしていたことを考えると、これに対応しない矩形の建物はやや奇異に思われるが、第2期の造営ではほぼ完全に取り壊されているため残念ながら平面形式を復原することは困難な状況である。この建造物について報告書では、用途、性格に不明な点は多いとしつつも、正方形の基壇とその中央に位置する建物が示す同心円的な有心性は、全方位的に均質な空間を獲得しようとした表れであると解釈し、そこから建物の用途として見晴らし台を兼ねた休息所、あるいは東屋的な使われ方を提示している。

3-2 第2期建物

第1期の基壇を利用しつつさらに規模を拡大したのが、第2期建物(図3下)である。中央基壇の東西幅は変更せず、南北方向のみ拡張し、北側では一段下がったテラスが設けられている。これに伴って、北側の脇階段は増築基壇の内部へ全て隠れることになったが、反対側の南脇階段は上から4段だけを第2期建物でも引き続き利用している。そのため拡張の様子は南北で異なり、南側では拡張部分が階段4段分だけ低く作られたことになる。さらに南北では、脇階段に代わって幅の広い長大な昇降路が設けられた。北側の昇降路が踏み面を彩色したいわゆる彩色階段である。一方南側は、階段の痕跡が認められなかったため、スロープ状の導入路を復原している。

このように基壇上面へは、北側が階段で直線的に導かれるのに対し、南側は北に上昇するスロープから西へ折れ、4段の階段、踊り場及び露台を経て到達する動線を採用している。左右の対称性が崩れている点は興味深いところである。また第1期に備えられた西階段は第2期においても引き続き存在していたと考えられ、中央基壇への昇降路は合計3箇所となっている。この点

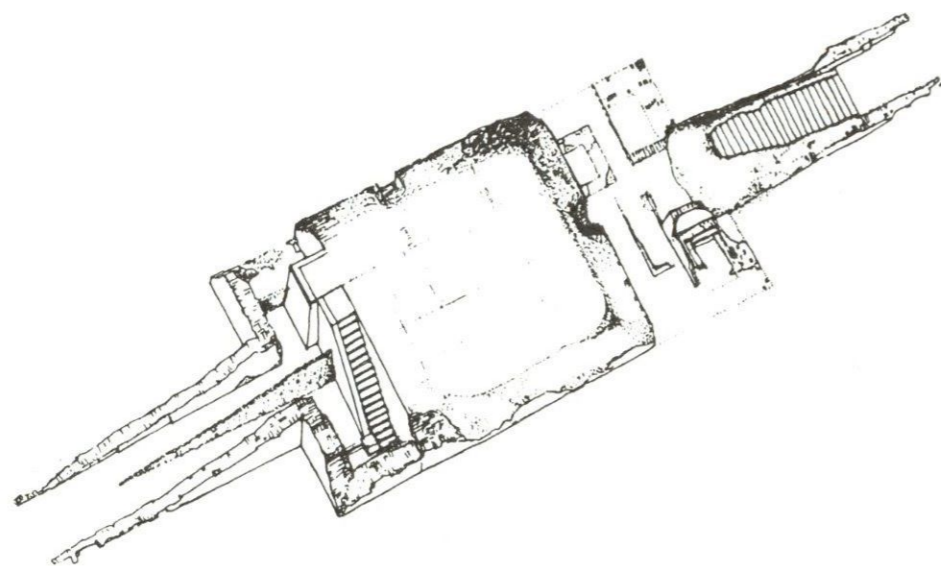


図2 「魚の丘」遺跡

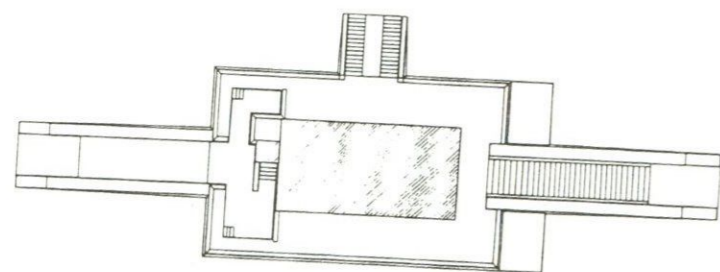
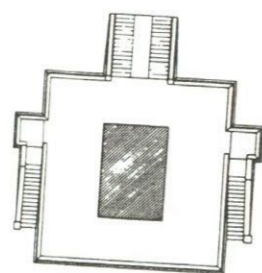


図3 上：第1期建物
下：第2期建物

は第1期と同じであるが、南北の長大な昇降路によって、建造物全体は南北の主軸を強く意識させる、有軸的な構成へ変化したと考えられる。西階段はこの軸線と方向を異にしており、用途、性格などにやや曖昧さが残るが、それ以上に大規模な南北昇降路に比べればさほど目立たず、違和感を感じさせない。

一方、基壇上では第1期建物がいったん取り壊され、東西の幅はそのままに、南北のみを旧規模の3倍に拡張した建物が新たに再建された。そのため第1期では東西方向を指向していた長軸は、第2期では南北方向へ変化し、長大な導入路に対応した強い軸線を生み出している。

このように第2期建物は第1期を拡張して作られたものであるが、報告書が指摘するように、単なる部分改修ではなく、性格を一変させる大改造であったと考えられる。しかしながら第1期建物の西階段や、南脇階段の上段4段とそれに続く踊り場及び露台など引き続き第2期においても使用された施設が認められている。第1期と第2期の建立時期の違いなど両者の関係は必ずしも明らかになっていないが、新たに築き直すことをせず同じ場所を再び用いるなど強い場所性を示唆しており、緩やかな連続性をもっていた可能性も考慮する必要があると思われる。

3-3 「魚の丘」建築の特質 - マルカタ王宮との比較から

報告書・建築編では、遺構全般に渡って様々な分析、検討がなされているが、全体を通底する大きな視点に「設計方法の分析」が挙げられる。これは建造に携わった者たちがどのような意図を持って計画していったのかを復元的に解読してみたもので、その切り口はいまなお新鮮に映る。しかしながら反面、エジプトに残る他の遺跡と比較して、どのような特徴を持ち、どのように位置付けられるのかという点にやや不満が残る。もっともこのことは次の検討課題として早い時期から認識されていた模様で、調査終了後には比較の視点を目的として、隣接するマルカタ王宮址の調査権を取得し、調査に着手している。そのようなして始められたマルカタ王宮址の調査研究も開始されてから10年以上が経過し、基礎的な資料が整備され、当初の比較考察が可能となってきた。

そこで以下の節では、基壇上部に築かれた第2期建物の平面形式について、比較の視点からその特質を整理していきたい。発掘調査では中央基壇の内部解剖という方法が採られたため、現在基壇は消失しており、直接平面を確認することはできない。そこで調査の際に作成された平面図や写真等を用いて、平面の特徴を整理し、マルカタ王宮址との比較考察を進めていきたい。

3-3-1 柱

中央基壇は南側に比べて北側の残りが悪く、特に彩色階段との接続部分が激しく崩壊している。煉瓦の並びを描いた平面図(図4, 図5)をみると、同じ向きに整然と敷き詰められた部分と、それとは向きを変え一列に並べられている箇所が認められる。前者が床面を、後者がそれを区画する壁体をなしていたことは容易に理解されよう。南側に残存する床面の煉瓦敷きを見

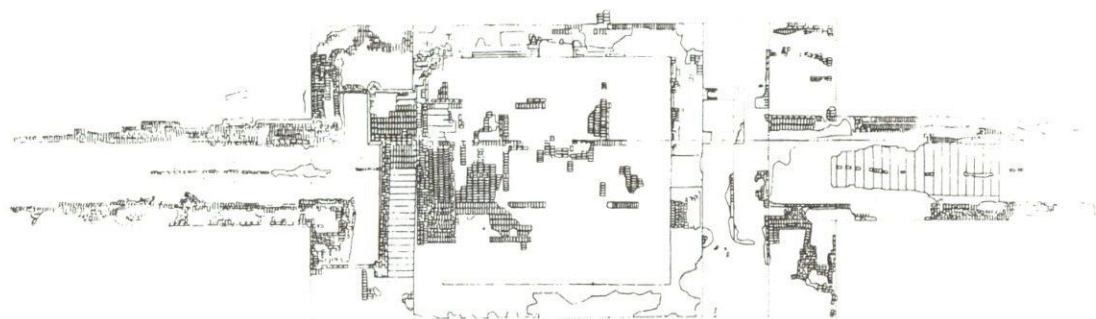


図4 平面図

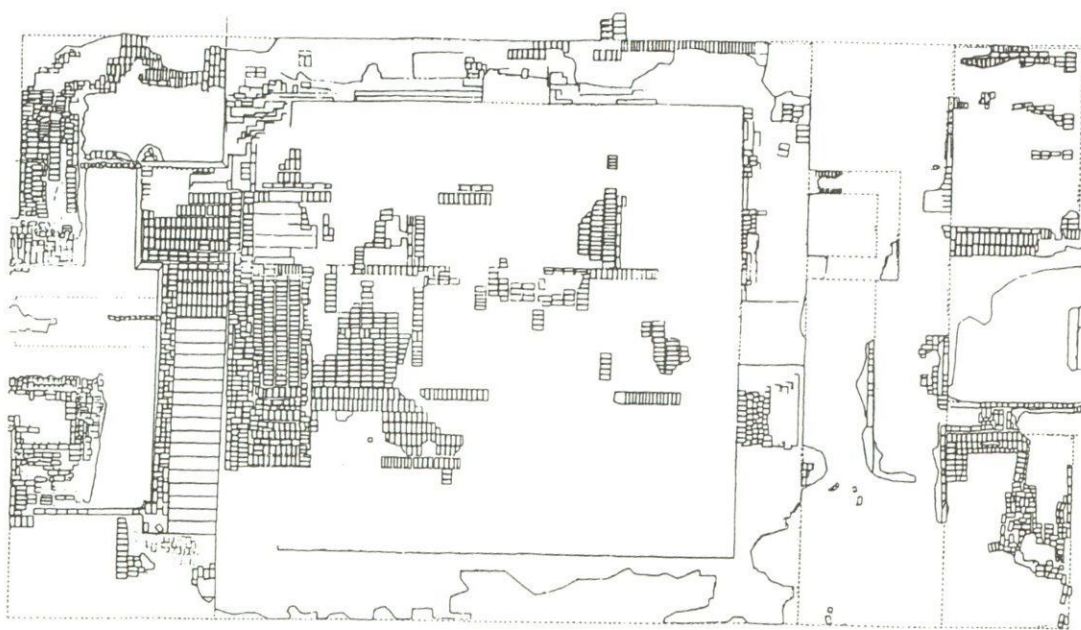


図5 中央基壇平面図

る限り、全面に渡って隙間なく敷き詰められ、柱礎などを据えた痕跡はみられない。柱の材質や様式は規模や性格にも左右されるが、少なくとも柱脚には石材が用いられることが圧倒的に多い。そして礎石を配したのちに床の煉瓦が張られるため、礎石が抜き取られるとそこだけ煉瓦のない穴状を呈することになる。また大規模な柱の場合、円形の礎石を取り囲むように煉瓦が放射状に並べられることもあるため、柱そのものが失われても、その有無は比較的容易に推察できることが多い。こうした手法はマルカタ王宮址でも広く採用されており、「魚の丘」建築においても同様の工法が用いられたことが類推される。しかしながら基壇状の平面を見る限りそのような窪みや煉瓦配置は全く認められない。それゆえ、少なくとも建物の南側では礎石を備えた柱は築かれなかったと考えるのが妥当と思われる。

一方、建物の中央部分では壁体の位置から南側に比べて規模の大きな空間が想定される。とはいえ、マルカタ王宮址でも、同程度の規模で柱を備えていない部屋が見られる。そのため構造的には柱を必要としない大きさの範疇であったと考えられよう。建物の北側部分は崩壊が激しいため床面の詳細は不明であるが、発掘調査において柱の断片が検出されなかった点を勘案すれば、礎石を備えた柱は築かれなかった可能性が高いと推察される。

このように建物内部には柱が築かれなかった可能性が高いと考えられるが、この点は建物の性格を捉える上で重要な点と思われる。というのも、柱は構造的な要請だけで作られるものではなく、その存在自体が空間の格式を示す重要な装置であることが多いからである。そのため柱を持たないことは単に空間が小さいということにとどまらず、空間そのものが私的な空間に近い可能性を示唆することとして注目される。

3-3-2 壁

次に壁体について検討してみたい。調査の際には壁体そのものはほぼ完全に失われ、基礎も煉瓦列が確認できるのみであった。これらは床の煉瓦面と同一レベルにありながら、床の煉瓦と向きを変えて並べているように見える(写真1)。そのため、床面の上に壁を築いたのではなく、はじめに壁体を築き、その後に床の煉瓦を据えたと判断される。例外的に南側では床面の上に積まれた煉瓦壁が見られるが、これは後に付加された壁か、壁厚から間仕切りのようなごく簡単な壁であったと推察される。

平面図で見る限り壁の厚さには、煉瓦の長手に等しい一枚分と、それに短手を加えた煉瓦一枚半の2種類が認められる。また煉瓦の積み方は広い面を上にして積む「平積み」を基本としていたと判断されるが、部分的に縦にした「縦積み」も用いられている。これらの煉瓦が壁の基礎部を兼ねている点を想起すれば、地業土の凹凸をこうした処理によって調整したものと思われる。

煉瓦一枚半の壁厚は西側で3カ所認められ、一つは南北方向に並び、あとの2つはやや中央よりで直交している。前者の煉瓦列は第2期建物の西側外壁に相当し、後者はそれぞれ第1期建物



写真1 南脇階段と踊場および露台

の南北外壁に対応すると考えられている。このように煉瓦一枚半の壁厚は建物の外壁に用いられた可能性が高く、それは第1期、第2期に共通した手法であったことが分かる。一方、煉瓦一枚分の壁厚は、建物を区切る内壁に採用されており、建物の外壁と、内部の壁で厚さを使い分けていた可能性が高い。

一般に壁厚は規模に応じて変化するが、これまで見た限り第1期と第2期で大きな違いは認められない。また隣接するマルカタ王宮址主王宮では、これとほぼ同じ規模をもつハーレム部でも内部は一枚半の壁厚が用いられており、また主王宮の周囲は更に厚い壁体で作られている。そのため「魚の丘」建築の特徴の一つに薄い壁厚を上げることができ、柱がなかったことと合わせ、内部を細かく区分けした平面構成を採る建造物であったと考えられる。

3-3-3 コーニス・トラス

発掘調査では、日乾煉瓦造の遺構と共にそこに描かれていた様々な彩色画片が検出されている。ここでは建築役物であるコーニス・トラス部について触れたい。「魚の丘」建築遺構から検出されたトラスについてはすでに西本助教授より包括的な考察がなされ、報告書の復原図に対して再検討を迫る解釈が提出されている。そのためここでは、マルカタ王宮址主王宮から検出されたトラスと規模の比較をしてみたい。

検出されたトラス片には泥で作られたものと、プラスター状のもの2種類が報告されている。いずれも白を下地とし赤線を縦と斜めに連続して描く、エジプトで広く見られる様式である。トラスの幅(高さ)は均一ではないが、前者が約60~85mm、後者のが約53~70mmと計測された。

一方マルカタ王宮址主王宮(図6)から検出されたトラスでも同じような白地に赤線の様式が多くみられるが、B室では全体を黒一色、またハーレム部K5室では青一色で塗りつぶすなど、部屋によって異なる様式が採用されている。またコーニスの幅もH室、G室、K5室など広間的な空間では60から70mmと大きく、一方B室やK4室など比較的規模の小さな部屋では40から50mmと小さくなっている。大きな空間である広庭から検出されたコーニスの幅が約42mmとやや小さい点など例外もあるが、概ね空間の規模に応じてコーニスの幅も対応しているように思われる。

これらと比べた場合、「魚の丘」建築が示す60~85mm、あるいは約53~70mmは大きな部類に属することが判る。「魚の丘」建築では内部に小部屋が多数想定され、かつ大型のトラスが2種類しか検出されていないことから、建物内部では用いられなかった可能性が高いと思われる。そのため報告書では、建物の外面に取り付けられた装飾と解釈している。その想定は極めて妥当と思われるが、マルカタ王宮址が部屋ごとにとりつけられていたことを想起すれば、基壇上の建造物は単一に近い機能、性格を採っていたものと考えられる。

3-3-4 平面構成

中央基壇上部の平面図は第2期建物を主に示しているが、調査時に撮影された写真からみるかぎり、一部この煉瓦敷きより低い面に据えられた煉瓦も描かれているように思われる。おそらく取り壊されずに残った第1期建物の基礎と考えられるが、報告書にはどの煉瓦がどの時期のものであるのか詳細な説明はなされていない。そのため誤った判断を犯している可能性を自覚しつつ、煉瓦列を書き分けてみた(図7)。

これによれば、第1期建物の内部は少なくとも南北に3等分され、その壁は煉瓦一枚分の薄いものであったと思われる。つまり、第1期建物も、内部を薄い壁で細かく仕切った平面形式を採っていたと考えられよう。なお建物の外側南にもこれと同じレベルと見られる煉瓦列が見られたが、第1期の一部に属するものか否かは不明である。

第2期建物はすでに述べたように、厚さ煉瓦一枚分の薄い壁で内部を仕切る平面構成であったと推測される。マルカタ王宮址主王宮のうち、寝室を伴う住居では、進行方向に対して横に長いホールと矩形のホールを経て寝室に到達する平面構成をとっている。これは主王宮西側に3棟並ぶ独立住居でも見られ、平面の類似性からこれとの関連が指摘されるアマールナ型住居においても採用されている。

特に、横長のホールは住居建築だけでなく、葬祭建築や宗教建築においても広く用いられる要素である。そのため、何らかの宗教的施設と考えられる「魚の丘」建築でもその存在を想定するのが自然と思われるが、報告書ではその可能性については触れていない。少なくとも想定される第2期建物内部には、建物の南北軸に平行して全体を貫く壁が少なくとも2つ観察されており、建物全幅に及ぶ横長の大きな空間を否定するものとなっている。

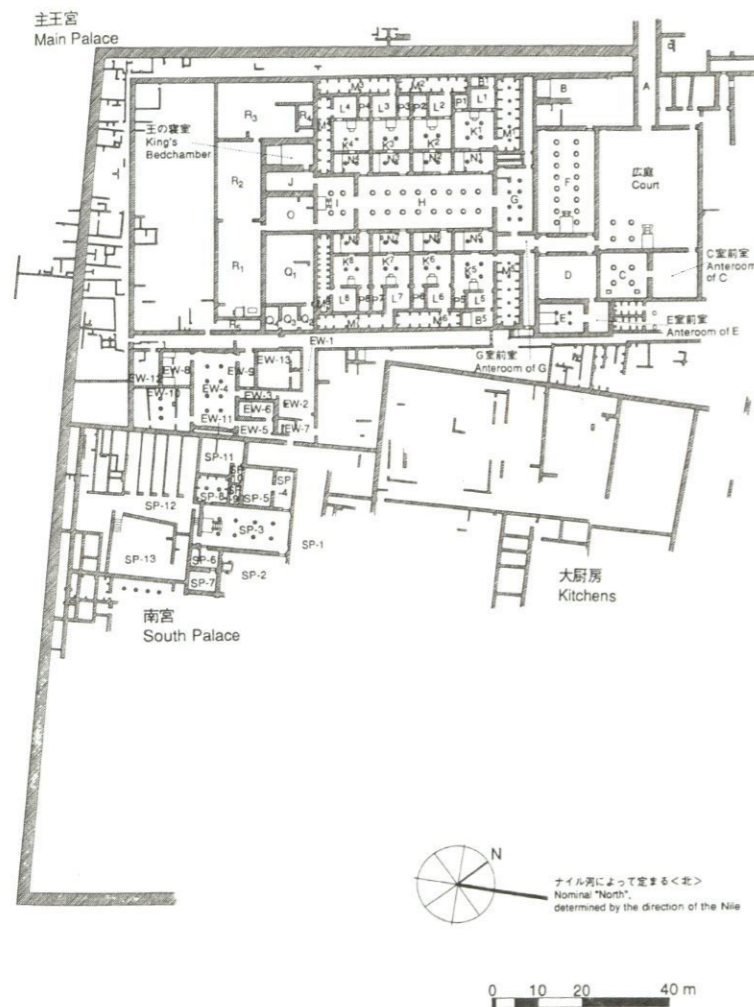


図6 マルカタ王宮址 主王宮

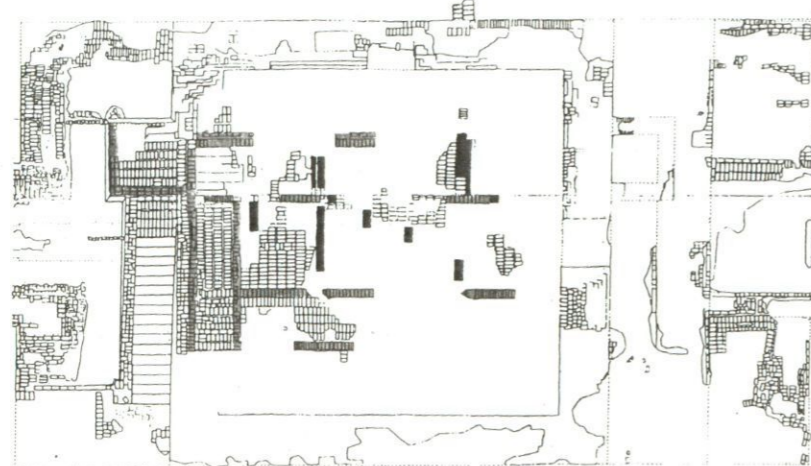


図7 壁体

これまでの点を総合すれば、第2期建物はホールや柱を持たず、薄い壁で区切られた小部屋から構成される平面形式であった可能性が指摘できる。しかしながら柱やホールを持たない形式はエジプトではむしろ特異な部類である。そのため仮にホールのような空間を基壇状に想定するとすれば、破壊が激しく詳細が不明とされる、彩色階段と建物との間の空間が唯一可能性として挙げられよう。報告書ではこの場所を単なるテラスと推測されているが、他の箇所と比べ激しく破壊されていること、導入路は直接建物に接続する機会が多いことなどを勘案すれば、この空間に何らかの施設を想定することもあながち誤りとはいえないのではないと思われる。この問題は類例との比較により考察を進めていくことが必要となつてこよう。そのため次章において同じ日乾煉瓦造のアマールナを取り上げてみたい。

3-3-5 階段とアマールナ型住居

第2期建物の別の大きな特徴として南側の脇階段が挙げられる(図8)。この脇階段は第1期に築かれたが、第2期の拡張で上から4段を残して埋められた、と考えられている。第2期建物はこの4段、踊り場、露台から直接入るように作られているため、全体の形状は矩形でなく南西隅の階段装置が張り出している。南脇階段は北脇階段のように全て基壇の内部に埋めてしまうことも可能であったはずであるが、このように一部を残した理由はよく分かっていない。

このように出入口を建物の外側に張り出す形式としてまず思い起こされるのが、アマールナで報告されている独立住居であろう(図9)。これはその規模の大きさや特徴的な平面構成から、いわゆる「アマールナ型住居」として知られている。全体は正方形をし、外側に数段の階段を持つ出入口を備える場合が多い。これは格式ある玄関として機能しており、また気候との関係から北側に付けられている。一方マルカタ王宮址でも、全体が正方形をしこれとの関連が指摘される独立住居が存在するが、外玄関は認められない(図10)。また、同じアメンヘテプ3世の建物とされるコム・アル=アブド(図11)では、改変されているが、南面に玄関らしき施設が見られる。

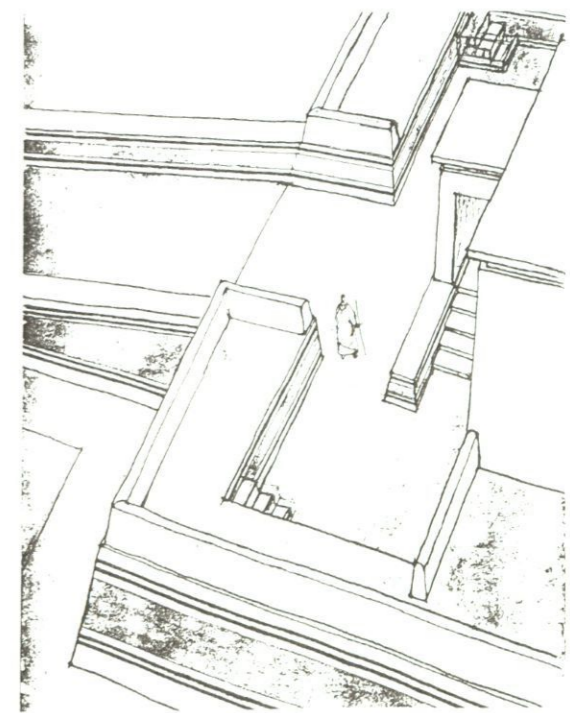
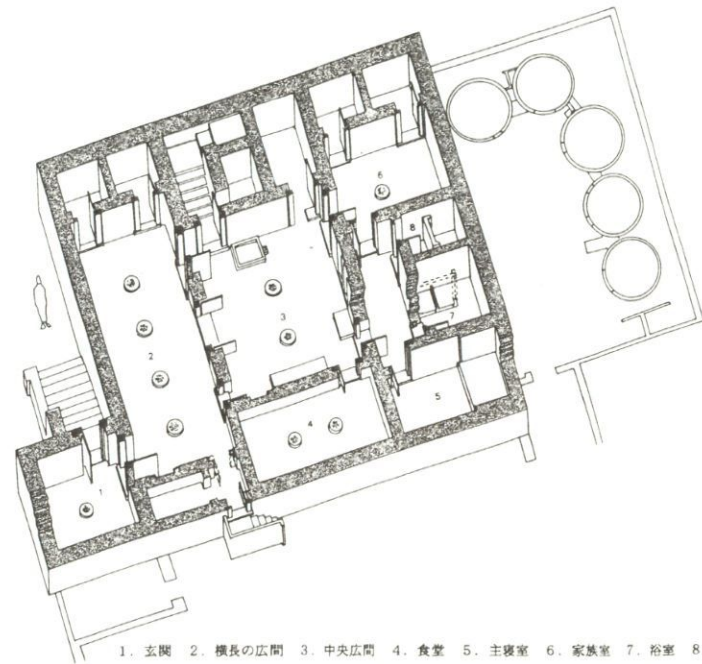


図8 南脇階段および露台

図9 アマールナ型住居復元図



1. 玄関 2. 横長の広間 3. 中央広間 4. 食堂 5. 主寝室 6. 家族室 7. 浴室 8. 便所

図10 マルカタ王宮 西住居址A

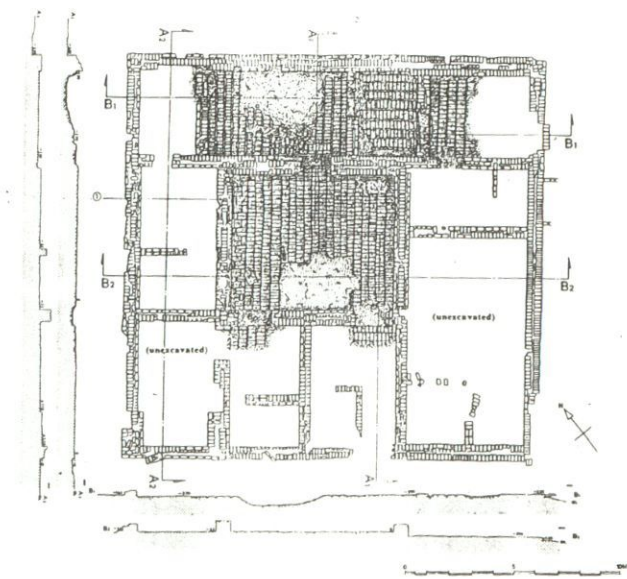
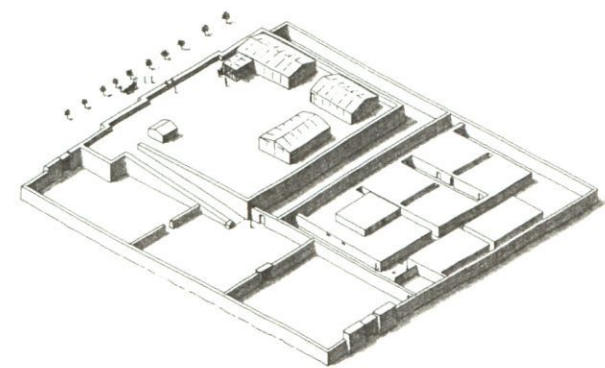


図11 コーム・アル=アブドー



これを見る限り外側に出入口が付く形式はマルカタ王宮址では認められず、次のアマールナにおいて広く用いられたスタイルであるように思われる。もちろんアマールナ型住居は寝室を備えた住居建築であることや、格式ある玄関として機能している点など、「魚の丘」建築とは基本的な点で多くの違いがある。そのため「魚の丘」建築での例をアマールナ型住居と結びつけるのは早計であるが、この形式の起源の研究に合わせ検討されるべき問題であり、重要な資料と考えられる。

4. アマールナとの比較

「魚の丘」建築は、日乾煉瓦に押印された王名などからアメンヘテプ3世時代の後期から晩期に築かれたと考えられている。一方本研究会では、彩色画片の図像学的分析などからアマールナ時代との関連性を指摘する興味深い見解が報告されている。建立時期の特定は重要な問題であり、マルカタ王宮址も含めた総合的な考察が必要であるが、以下に於いて建築学的視点からアマールナとの比較考察を試み、この課題の一助としたい。

アマールナにおいて本格的な基壇を備えた建造物としては、北東に築かれた「砂漠の祭壇」、南方のコム・アル=ナーナに位置する「中央基壇」と「南のパビリオン」、更にその南方のマル・アテン内の小建造物(図12)がまず挙げられよう。「砂漠の祭壇」(図13)は、北の祭壇(I)、中央祭壇(II)、南の祭壇(III)の大きく3つの建物から構成されている。南方のコム・アル=ナーナ(図14)は近年精力的に調査が進められている地域であり、これまでのところ北側に大規模な「中央基壇」が、その南に「南のパビリオン」が検出されている。

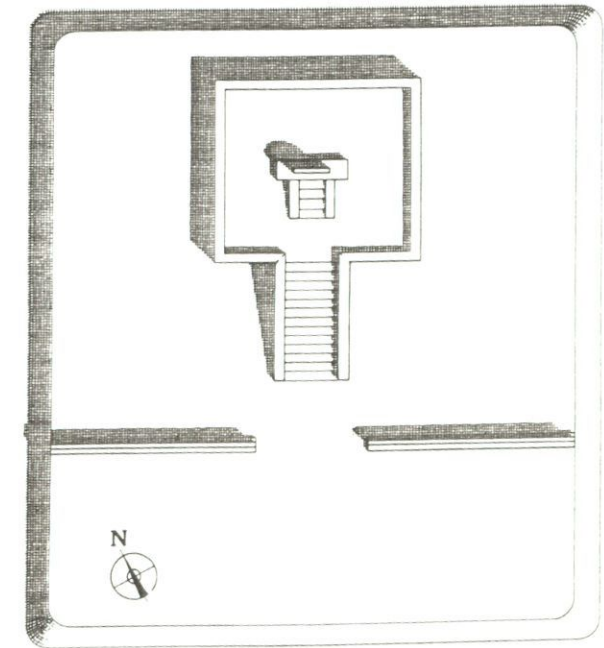


図12 アマールナ: マル・アテン

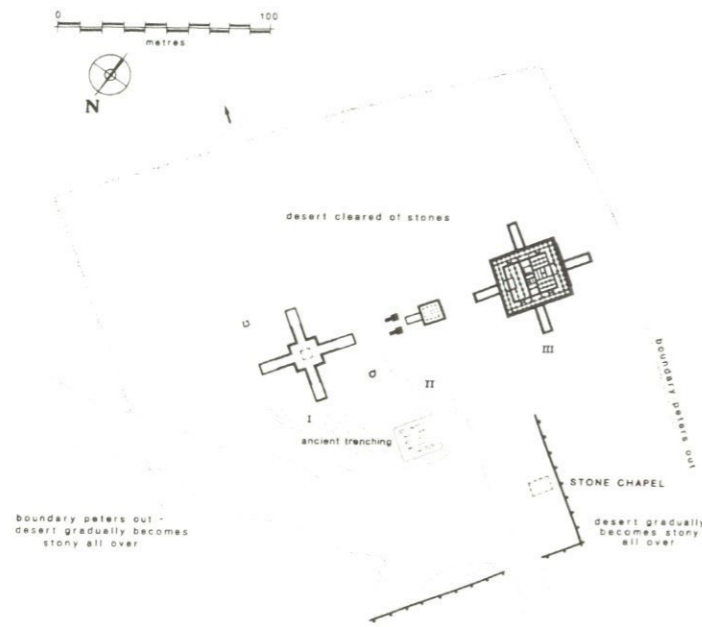


図13 アマルナ：砂漠の祭壇

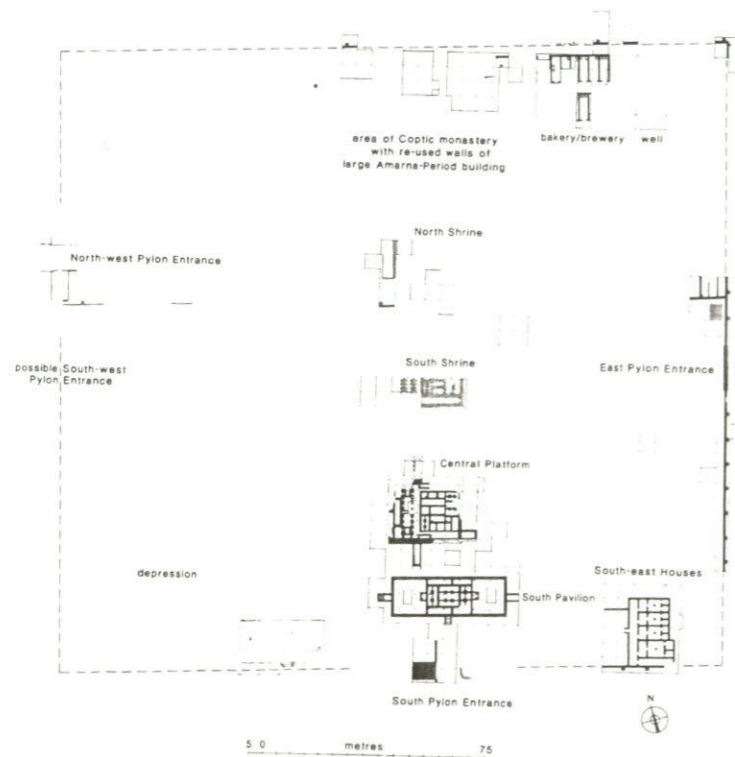


図14 コーム・アル=ナーナ

これらの建造物は、これまで知られているアマルナ地域の比較的縁辺に立地している点は、同じく王宮の南に造営された「魚の丘」建築を考える上で興味を惹く。アマルナ地域の調査を担当するイギリス隊の手によって、現在これらの祭壇とアマルナの諸神殿との関係など、都市構成の視点による研究が進められている。これらの成果を援用しつつマルカタ地域の都市を分析し、機能の比較など包括的な研究が推進されることが期待される。

砂漠の祭壇では祭壇IとIIIにおいて四方へ延びる導入路が作られ、同様にコーム・アル=ナーナでも複数の昇降路が築かれている。そのうちコーム・アル=ナーナの南のパビリオンでは、建物の主軸に沿う東西の昇降路に加え、南側にも階段が付けられている。特にこの南側の階段は、更に南方に築かれた塔門と正確に対応しており、この階段を正面とする考え方が提示されている。「魚の丘」第2期建物でも3方に昇降路を備える形式が想定されており関連が注目される。

「魚の丘」建築同様、基壇上の建物はほとんど失われ基礎の煉瓦を残すのみであるが、砂漠の祭壇IIIとコーム・アル=ナーナについては、平面の形式をある程度推定することができる。それによれば建物全体は矩形を基本とし、「魚の丘」建築で認められた南脇階段のような施設は認められない。また各々の建物の機能については不明な点が多いが、砂漠の祭壇IIIはむしろパビリオンのような建物であったと考えられ、またコーム・アル=ナーナの中央基壇はいわゆる出現の窓として新王国時代に描かれた建物の形式に類似しているとの指摘がなされている。

砂漠の祭壇IIIやコーム・アル=ナーナの平面図をみると、正方形状のものが連なって描かれている事に気づく。この方形の基礎はおそらく柱のものと推測されているが、それらをつなぐ薄い擁壁の詳細は不明である。「魚の丘」建築ではこのような基礎の工法を示す痕跡は認められていない。このことは「魚の丘」建築が柱を持たなかったことを示しているのかもしれないが、マルカタ王宮址でもこのような基礎は確認されていないため、その工法の詳細な報告が待たれるところである。

内部の構成をみると、いずれも壁を主とする構造をし、小さな部屋が多数作られていることが判る。この点は「魚の丘」建築と類似した傾向を示している。しかしながら砂漠の祭壇IIIでは北側に柱が立ち並ぶホールが復原されている。また、コーム・アル=ナーナでも、中央基壇では基壇全幅におよぶ大規模な列柱ホールが西側に、南のパビリオンでは中央に想定されている。このようにアマルナでは柱を備えたホールを設ける場合が多いように思われる。これまでのところ「魚の丘」建築ではホールのような大空間は想定されておらず、この点に最も大きな違いを指摘することができる。

このようにアマルナに残る基壇状建造物と比較した場合、日乾煉瓦という材料や立地、3方向に昇降路を備え、内部が小空間で構成されているなどいくつかの点に共通性が認められる。一方で列柱を伴う大空間を持たないことや方形の基礎を薄い擁壁でつなぐ手法が採られていないことなどに違いも見られる。エジプトの建築は伝統の墨守といった性格が強く、緩やかな変化のなかで推移しているように見える。しかし細部に注意を払えば、時代や地域はむしろのこと

同じ地域内でさえ実に豊かな意匠、ヴァリエーションを採っていることに驚く。そのため自戒を込めていえば、ついついその差異ばかりを強調する過ちを犯しがちであるが、その重要性も踏まえつつ、建造物の底を脈々と流れる頑固なまでの一貫性を浮かび上がらせることが肝要であろう。そのため「魚の丘」建築のなかでどこを伝統として重視し、一方どこに自由な意匠を取り入れているのかに注意しながら研究を進めることが大切と考える。

5. 結びにかえて

マルカタ南「魚の丘」建築の調査が終了し15年近くが経過した。この調査は、建築史を専門とする研究者が考古学や美術史など他分野の方々と協力しながら進める合同調査であり、今でこそ一般的となった、他分野の専門家が共同で進める学際的な調査隊の先駆けと言えるであろう。また建築史研究にとっても、建築を専門とする人間が、発掘の段階から対象に向かうという点で、研究方法の可能性を広げた事例と位置づけることができよう。残念ながら筆者が建築史研究室の扉を叩いた時にはこの発掘調査はすでに終了しており、後年マルカタ王宮調査の際に訪れたほかは、その成果を記した報告書『マルカタ南〔I〕— 魚の丘 — <考古編><建築編>』を通じてこの遺跡や調査の詳細をうかがい知るのみである。しかしながら活字となって出版されたものは、調査のごく一部を記しているにすぎず、その裏で行われた様々な可能性や解釈に対する膨大な検証の過程を知ることは困難である。そのため、「魚の丘」の調査に直接携わったことがない筆者が、報告書とわずかな写真を頼りに思いつくまま述べたことは、あるいは調査の時や報告書の執筆の際にすでに検討され、排除された解決済みの問題であるのかもしれない。その点を自覚しつつ、調査に携わっていないからこそ別の視点でこの遺跡を考えることができないうかとも考えている。この拙稿に対しご批判、ご教示いただければ幸いである。

<図版出典>

- 図1 早稲田大学古代エジプト建築調査隊編：『マルカタ王宮の研究 マルカタ王宮址発掘調査 1985-1988』中央公論美術出版（1993），p.57，図2-1-1・1。（略表記『マルカタ王宮の研究』）
- 図2 古代エジプト調査委員会編：『マルカタ南〔I〕— 魚の丘 — <建築編>』早稲田大学出版部（1983），p.46，Fig.29。（略表記『マルカタ南〔I〕』）
- 図3 前掲，p.228，Fig.169.
- 図4 前掲，p.47，Fig.30.
- 図5 『マルカタ王宮の研究』，p.12，図1-2-2・5。（初出『マルカタ南〔I〕』，p.86，Fig.56.）
- 図6 『マルカタ王宮の研究』，p.71，図2-2-1・3.
- 図7 前掲，p.12，図1-2-2・5を改変。（初出『マルカタ南〔I〕』，p.86，Fig.56.）
- 図8 前掲，p.235，fig.177.
- 図9 西本直子：「家具復元で識るその造型力について」『生きる 別冊VII』安田火災海上保険株式会社広報部（1997），p.71.
- 図10 早稲田大学大学院博士前期課程、遠藤孝治氏作成による実測図
- 図11 Kemp, B. J.: *Ancient Egypt: Anatomy of a Civilization*, London and New York, (1989), p.221, Fig.76. (初出 Kemp, B. J.: "A Building of Amenophis III at Kom El-Abd", *JEA* 63 (1977), p.79, Fig.3.)
- 図12 Kemp, B. J.: "Outlying Temples at Amarna", in B. J. Kemp ed., *Amarna Reports VI*, London, (1995), p.422, Fig.15.7.
- 図13 *Ibid.*, p.449, Fig.15.25.
- 図14 *Ibid.*, p.435, Fig.15.14.
- 写真1 『マルカタ南〔I〕』，p.50，Fig.32.

編集後記

私達早稲田大学古代エジプト調査室の活動の原点は「マルカタ南魚の丘遺跡」である。1971年1月14日に発見されたこの遺跡なくしては私達の今日までのエジプトに於ける発掘調査は語れない。1964年早稲田大学の中に設立されたエジプト研究会という学生サークルからは、また早稲田大学のエジプト調査の第一ターニングポイントは1966年のジェネラル・サーベイの成功であり、そして第二は1971年の本格調査の開始であった。ここまでにもたくさんの難関はあったが、本格調査が始まると、かえって大きな宿題を背負ってしまったのだ。それ以後3か年の内に何か意味のある発見をしないと文部省科学研究費が続いてもらえないというプレッシャーがあった。だから1973年度はラストチャンスというわけだったのだが、スタート時点で第4次中東戦争の始まりという難題が起きてしまった。しかし天は私達を見捨てなかった。たった1週間で終わってくれた戦争のおかげで、私達は1973年12月に発掘を再開できた。その結果「魚の丘」が発見できたのだ。マルカタ南地区を発掘した当初からこの丘の存在は気にかけていたが、調査の主目標が王朝成立前後になっていたのも、耕作地と低位砂漠の境を中心に調査を行っていた。そこでローマ時代と思われる遺構を発掘してしまい、その対応におおわらわらで、ここまで手を延ばせなかったというのが事情であった。

今回発表の諸氏は近藤二郎氏を除いてこの遺跡を実際に手がけた人ではない。しかしその時の発掘日誌や、写真、図面などを克明に検討し、すばらしい検証を行っている。かえって発掘に参加しなかったことで、客観的になっているという気がする。従来、考古学者は発掘し、報告書を出しておわりというケースが多かった。私はこれでは真の考古学は育たないと考え、11年程前から特別チームを編成し、研究を続けてきた。そのひとつがこれである。二次資料としては良い出来だと自負している。しかし、まだまだ進めていかなければ、天国で見守ってくれている、指導をしてくれた、故川村喜一教授が満足しないと思うので、この研究をつづけたと思う。

なお、本研究は、平成5年度文部省科学研究費補助金一般研究B課題研究「エジプト マルカタ南「魚の丘」遺跡の復元研究と同遺跡出土彩画片の保存」、早稲田大学1994年度特定課題研究(94B-16)「エジプト・マルカタ遺跡出土の彩画片の保存と復元」、早稲田大学1996年度特定課題研究(96B-038)「エジプト マルカタ遺跡出土彩画片の保存と復元」の研究成果の一部である。

吉村 作治

2014 年度第 2 回エジプト考古学特別講演会

メトロポリタン美術館を中心とする合同調査隊による
ルクソール西岸マルカタ王宮の調査：2008-2014 年

The Joint Expedition to Malqata: 2008-2014

【プログラム】

18:30 開会の挨拶 吉村作治(早稲田大学名誉教授・東日本国際大学副学長)

18:35 発表 ダイアナ・クレイグ・パッチ博士(メトロポリタン美術館エジプト美術部長)

19:25 閉会の挨拶 近藤二郎(早稲田大学文学学術院教授)

司会・通訳 河合 望(早稲田大学高等研究所准教授)

【発表要旨】

2008 年にメトロポリタン美術館はアメンヘテプ 3 世の王宮のあるマルカタ遺跡に帰還しました。この遺跡で、私たちは 1910 年から 1920 年の間に発掘調査を実施しました。私、ダイアナ・クレイグ・パッチとエモリー大学のピーター・ラコバラ博士を隊長とする新しい調査では、遺跡の複雑な構造を研究し、遺構を包括的に記録し、崩壊の危機に瀕している王宮施設の日乾煉瓦の遺構を保護することを計画しました。5 シーズンの調査の後、我々は、多くの遺跡地図と衛星画像を融合しマルカタの都市の地図を作成し、王宮を新しい日乾煉瓦で保護し、アメン神殿の日乾煉瓦の多くを記録しました。また北の集落についても精査を行いました。本発表は、これらのマルカタ遺跡での我々の最近の成果を報告いたします。

【発表者略歴】 ダイアナ・クレイグ・パッチ博士 / メトロポリタン美術館エジプト美術部長

ペンシルベニア大学大学院アジア・中東学部エジプト学専攻でエジプト学の博士号を取得。ペンシルベニア大学考古学・人類学博物館学芸員、メトロポリタン美術館学芸員などを経て、2013 年よりメトロポリタン美術館エジプト美術部部長。ルクソール西岸マルカタ王宮の発掘調査・保存修復プロジェクトを指揮する。

主催：早稲田大学エジプト学研究所・早稲田大学エジプト学会

共催：早稲田大学高等研究所

エジプト学研究 別冊 第 2 号 (1998-2)

1998 年 3 月 31 日 発行

発行所／早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 新宿区戸塚町 1-104

早稲田大学古代エジプト調査室内

発行人／吉村作治

編集 吉村作治

印刷 手塚印刷株式会社